長期にわたる口唇部びらんとひびわれ

東京女子医科大学東医療センター皮膚科教授
田　中　　勝
（聞き手　池田志孝）

口唇部びらんとひびわれが長年持続、全身症状に異常はありません。原因、治療方法についてご教示ください。

＜福岡県開業医＞

池田　口唇部びらんとひびわれが長年続いているが、全身症状に特に異常はないという質問です。男女とか年齢とかはわかりませんが、どのような疾患が考えられるのでしょうか。

田中　まず、かなり長い期間にわたりびらんが続いているということで、第一に考えられるのは扁平苔癬かと思うのです。また、高齢の方ですと光線角化症の口唇部に生じた場合も考えられますし、若い女性の方ですと、口紅とかリップクリームによる接触皮膚炎が長引いていることも考えられます。

池田　３つの可能性があるという話ですけれども、それぞれの疾患の概要と診断法、治療法についてお聞かせください。

田中　扁平苔癬は、通常、口腔内の粘膜や手背などに生じることが多いアレルギー性の疾患なのですけれども、口唇部に生じることも時々ありまして、原因としてはC型肝炎とか金属アレルギー、薬剤性などが考えられます。

池田　原因は多様ということですけれども、診断はまずどのようにされるのでしょうか。

田中　扁平苔癬を疑ったら、通常は生検を行って組織学的に確かめるのが一番確実だと思います。

池田　まず生検ですね。そして扁平苔癬が強く疑われた場合、C型肝炎が原因なら採血等でわかると思うのですけれども、薬剤や金属はどのように調べるのでしょうか。

田中　のんでいる薬剤ですと、パッチテストをしたり、DLSTを行うこともあるのですけれども、なかなかはっきりしないことがあります。薬剤を中

止して経過を見るとか、再投与で再発があるとか、そういったことを考えて診断に至ることが多いと思います。

池田　金属というのは、歯科金属なのでしょうか。

田中　歯科金属の場合に口唇部の扁平苔癬が起こりやすいように思います。

池田　直接金属が当たるということ以外に、何か金属を飲み込んでしまったりして、アレルギー的に起こるのでしょうか。

田中　この直接の機序まではまだわかっていないのですけれども、おそらく口腔内の金属が微量溶け出して、それを吸収して口唇部や掌蹠などに皮疹を起こすことがあるのではないかと思います。

池田　金属が関係していると疑う場合、なかなか除去とか付加は難しいと思うので、薬剤同様パッチテストということになると、内科の先生はあまりご存じないと思うのですが、具体的にはどのように行われるのでしょうか。

田中　通常、大きな皮膚科ですとパッチテストには対応できると思います。特に金属アレルギーの場合には十数種類の金属に対しての検査を同時に行うことが多いと思いますので、それぞれの溶液とか、軟膏にしたものをガーゼを貼った絆創膏にこすりつけて、それを背中に48時間貼付するという試験方法です。

池田　これは市販されているものはあるのでしょうか。

田中　全部そろっているセットはなかなかないので、病院によってどの程度までそろえているかというところも、診断になかなかたどり着かない原因かと思います。そろっているところでは、自分たちで準備してパッチテストに備えているようですけれども、施設によって随分異なるように思います。

池田　なかなか難しい技術ですね。そういう意味では、大きな病院、あるいは大学病院に紹介して確定診断していただくことが肝要ですね。

田中　そうですね。

池田　では、次に光線角化症についてお聞かせください。

田中　光線角化症は、高齢者の場合に生じる、特に顔面に多いのですけれども、口唇部だけに生じることもあります。組織学的にも扁平苔癬との鑑別が難しい疾患だと思います。進行すると有棘細胞がんに移行しますので、命にかかわる病気ですから、きちんと生検して診断しなければならないと思います。

池田　おそらく光線角化症の中でも扁平苔癬に似たものがあると思うのですけれども、組織学的な鑑別の重要点はどんな点なのでしょうか。

田中　異型細胞がどの程度に見られるかということで、光線角化症ないし有棘細胞がんであるという判断をするのですけれども、ここは私でも病理を

見るとかなり迷うことがありまして、扁平苔癬で炎症が強いと、かなり角化細胞の異型性が強くなって、判断に迷うこともあります。

池田　その際は、いったん生検を取って、しばらくフォローアップして、また生検ということでしょうか。

田中　迷う場合には、まず一度、扁平苔癬として、なるべく強力な治療を行って、それで改善するかどうかということが、確かな判断の材料になります。

池田　扁平苔癬の治療はどういうことをされるのでしょう。

田中　まず原因がはっきりし、原因の除去が可能な場合、あるいは原疾患の治療が可能な場合はそれを行うのですけれども、難しい場合にはステロイドの外用薬で治療します。

池田　その反応性である程度光線角化症とも鑑別ができるということですね。

田中　はい。

池田　光線角化症の治療はどのようなことをするのでしょうか。

田中　光線角化症は、口唇部の場合はなかなか治療が難しいのですけれども、ステロイド治療で難治なびらんで、組織学的に異型性が強いと判断された場合には、手術という方法を考えることになります。

池田　切り取ってしまうということでしょうか。

田中　はい。

池田　最近、光線角化症の外用剤ができたという報道があったのですけれども。

田中　イミキモドという外用薬を、顔面の場合には使うことができるのですけれども、粘膜には使えないという縛りがありますので、今のところ、口唇部では手術が唯一の治療方法になることが多いようです。

池田　では、次に接触皮膚炎についておうかがいしたいと思います。

田中　接触皮膚炎の原因は多岐にわたるのですけれども、口唇部で長く続く場合には、口紅とかリップクリームが原因であることがまず考えられます。

池田　例えば口紅とかリップクリーム、グロスなどがありますけれども、何か種類によって、特に起こしやすいものは報告されているのでしょうか。

田中　昔から有名なのは、口紅とかリップクリームに含まれている基剤の中で、リシノレイン酸という成分がアレルギーを起こしやすいことがわかっています。

池田　そういったものが含まれているものを長時間使っていると、ずっと接触皮膚炎が続いてしまうという考えですね。

田中　はい。共通に含まれている成分であることから、口紅の製品を変えても繰り返し同じ症状を起こしてしまうこともあるようです。

池田　その場合はメーカーを変えても、その成分が入っていれば繰り返してしまうのですね。

田中　そうなのです。ですから、リシノレイン酸を含まないものを考えてつくってもらうとか、ちょっと特別な配慮が必要になることがあります。

池田　なかなか難しいですね。よくグロスを塗ったりしながら同じ口紅を使い続けている方がいらっしゃると思うのですけれども、これはかえって症状を遷延化してしまう原因になるわけですね。

田中　長引いている場合には必ずパッチテストをやって、その製品が合うか合わないか確認をしたほうがいいと思います。

池田　口紅等のパッチテストは、そのまま塗ってしまうと口紅の色で赤くなってしまうのですけれども、何か特別な配慮をしながらパッチテストを行うのでしょうか。

田中　確かに、赤い口紅が陽性反応を起こしているか否かの判定は、口紅を落とさないとわからないのですけれども、一応48時間後に口紅を落としても赤い反応が見られるかどうかで、陽性か陰性かの判断をしています。

池田　反応が強くなれば、紅斑だけではなくて、丘疹になったりするのでしょうか。

田中　浮腫性の紅斑といって、赤く膨らんだ状態になりますし、ひどい場合には水ぶくれを生じることもあります。

池田　その場合はわかりやすいということですね。

田中　そうですね。

池田　もちろん、掻痒等も生じてくることになりますね。

田中　はい。貼った場所がかゆくなります。

池田　原因がわかったら放置はできません。接触皮膚炎の治療はどのように行われるのでしょうか。

田中　原則としては、その製品を使わないことと、早く治すことが重要ですから、ステロイドの外用薬を用います。

池田　どのようなステロイドを使うのでしょうか。

田中　唇の場合には意外と強めのステロイドを使っても大丈夫なことが多いので、ストロンゲストを使うこともありますし、ベリーストロングのクラスを使うことも多いようです。

池田　唇ですと、薄い感じがして、あまり強いものは使いづらい感じがしましたけれども、意外と強いものも大丈夫であると。

田中　扁平苔癬などの場合には、特に判断を早くしなければならないこともあり、ストロンゲストを使うことにしています。

池田　意外と副作用等は気にならないのですね。もちろん短期間でしょう

けれども。

田中　あまり長期間になることはないように思います。

池田　接触皮膚炎、扁平苔癬、光線角化症と出ましたけれども、紫外線による皮膚障害で、ほかに何か、顔面で特別なものはあるのでしょうか。

田中　顔面では、光線過敏症の原因は紫外線が一番多いのですけれども、最近では薬剤性の光線過敏症も再び増えているような様子があります。

池田　どのような種類の薬剤なのでしょうか。

田中　以前はサイアザイド系の利尿薬で光線過敏症がよく生じたのですけれども、最近、ARBとサイアザイドの合剤が新しく使われるようになりまして、光線過敏症型の薬疹がリバイバルのように起こっているようなところがあります。

池田　複合剤によるサイアザイドの影響ですか。

田中　サイアザイドの成分ですね。

池田　そういう意味では、ある意味で複合剤、ジェネリックのようなかたちでよく使われていますけれども、光線性皮膚炎は要注意ということになりますね。

田中　そうですね。

池田　ありがとうございました。